

解答

配点

①	問1 イ	問2 イ	問3 エ	問4 ア	問5 ア	①	各4点×8＝32点
	問6 エ	問7 a	明智先生	b	むしろくしゃした気持ち	②	各4点×8＝32点
	問8 ウ					③	各2点×10＝20点
						④	各2点×8＝16点
②	問1 ア	問2 a	例を与える人	b	観察		
	問3 a	怖い	b	嫌われ、追い払われる存在	c		
	問4	(1) かっさらおう	(2) イ	問5 イ	問6 ウ		
③	問1	(1) 三	(2) 二				
	問2	(1) エ	(2) ウ	(3) イ	(4) ア		
	問3	(1) イ	(2) エ	(3) ア	(4) ウ		
④	(1) どうぼう	(2) かわく	(3) かいめつ	(4) おか(す)			
	(5) 破損	(6) 恩義	(7) 皮革	(8) 粉			

採点基準 ① 問7 ② 問2・問3 a b 各完答。④ (1) 「どうぼう」も可。

〔解説〕

①〔文学的文章〕小説文の読解

出典は、まはら三桃『日田中学校カウンセラー室』。カウンセラー室に来た「おれ」(白下部素人)は、先週カウンセラー室から持ち出したカッターナイフを返すことと決意し、実行します。そして、胸のざわめきを隠すためにカウンセラーの綾と話をしているうちに、気持ちが悪く落ち着いてくるのを感じます。

問1 〈心情〉「肩間にしわを寄せる」は、困惑や不愉快さを示す表現。この感情に加えて、「嬉しいような、ばかにされたような気にもなつた」ことで、「脳みそがもやもやした」のである。

問2 〈表現〉直後に「背中がすつと伸びた。頭の中のクモの巣が、風できれいきつぱり吹きとんだみたいだった」とあることから、「もやもやし」ていた「おれ」の気分がすつきりしたことがわかる。

問3 〈心情〉文章の最後に、「カッターナイフを持ち出したあとの気持ちが表現されている。「カッターナイフは……日を追うごとに、ポケットはずんずん重たくなつていった。……左ポケットを軽くしたかったから」とあるように、「おれ」は、カッターナイフを重荷に感じるようになっていたのである。

問4 〈文脈・表現〉前後の綾さんの態度や口調から考える。また、綾さんがカウンセラーであることから、「どこに」が適切であると判断できる。

問5 〈心情〉カッターナイフを戻した「おれ」は、綾さんの様子が気になつていて、綾さんがカッターナイフに気がつけば、自分が疑われるかもしれないので、平静をよそおおうとしているのである。

問6 〈心情〉問5と関連させて考える。「おれ」は、カッターナイフを持ち出したことがばれるのではないかと不安やおびえを抱えている。そうした気持ちを隠すために「おれ」はしゃべり続けているのである。

問7 〈内容理解〉先週のことを回想している。「先週この部屋に来たとき……」からの三つの段落に着目する。「盗む気なんかなかった」カッターナイフを「つい触つたらそのまま握つてしま」い、そうしたら「担任(明智先生)に対するむしろくしゃした気持ち」が「すーっとおさまつた」のである。

問8 〈表現〉「スーッ」という擬声語、「もやもや」「とんだん」「すーっと」などの擬態語が効果的に用いられている。ア「隠晦や擬人法」は使われていない。イ「第三者的な視点」が不適切。エ「会話文」によつては心情は描かれていない。

②〔説明的文章〕説明文の読解

出典は、唐沢孝一「カラスはどれほど賢いか」。都市に生息するカラスがどんな戦略をとつてきたのかを、ハトと比較しながら説明しています。人慣れたカラスの出現が人のカラス観を変え、カラスはますます人に接近してきたと筆者は述べています。

問1 〈接続語〉A 前後で新宿御苑を訪れる人の様子を並べて述べているので、並列累加の「また」が入る。B 「追い払われる」から「人には接近してこない」という文脈なので、順接の「従つて」が入る。

問2 〈内容理解〉④段落で説明されているのと同様のカラスの行動である。④段落の最後に「カラスはいろいろな人をじつくりと観察しており、人を見分けて行動している」とある。

問3 〈内容理解〉⑤段落にあるように、以前は「カラスは怖い」と思う人が多かった。また、⑦段落にあるように、カラスは「嫌われ、追い払われる存在」であった。ところが、⑤・⑥段落で説明されているような現象によつて、人とカラスの距離が近くなったのである。

問4 〈内容理解〉筆者は、都市のカラスの生態について、ハトと対比させながら説明している。また、人のカラス観が変化しているということを説明している。これらの点を押さえたうえで、文章と表を照合してあてはまる言葉をとらえる。

(1) 直前に「ハトの餌を」とあることに注意して、カラス、ハト、人の「三つ巴の関係」について説明している③段落の内容をとらえる。

(2) 悪いイメージをもたれていたカラスであるが、「人慣れたカラスの出現」と「人のカラス観の変化」によつて、カラスの戦略が変わり、その結果、ハトや他の都市鳥たちが打撃をうけると説明されている。

問5 〈段落構成〉⑤段落の前半と⑥段落では、人に接近するようになったカラスの例が挙げられている。これらの例は、⑤段落の後半で示されている筆者の見解(人を恐れないうカラスの出現により……餌にありつけるという構図だ)を裏づけるものになっている。

問6 〈内容理解〉ウは、③段落の内容と一致している。ア「人に依存する戦略」とは述べていない。イ「ハトの「体の強さや飛行技術」については触れていない。エ「ハトは「地方へ移動」する」とは述べていない。

③〔助詞〕

問1 (1) 「も」は副助詞。「て」は接続助詞。「よ」は終助詞。

(2) 「は」は副助詞。「ので」は接続助詞。

(3) 「とも」は強調の意味の終助詞。

(4) 「ばかり」は限定を示す副助詞。

(5) 「から」は順接の接続助詞。

(6) 「から」は起点を示す格助詞。

問3 (1) 例文とイの「が」は、主語を示す格助詞。ア・エは、逆接の接続助詞。ウは、前置きを示す接続助詞。

(2) すべて格助詞。例文とエの「の」は、体言と同じはたらきをし、「こと」または「もの」と言い換えられる。アは、連体修飾語をつくる「の」。イ・ウは、主語を示し、「が」と言い換えられる。

(3) すべて副助詞。例文とアの「まで」は、到達点・範囲を示す。イは、限定を示す。ウは、極端な例を挙げて他を類推させる意味で、「さえ」「すら」と言い換えられる。エは、添加を示す。

(4) すべて終助詞。例文とウの「か」は反語を示す。ア・エは、疑問・質問を示す。イは、感動を示す。